

「肝臓診療 A to Z 国立がんセンター東病院の治療戦略」

国立がんセンター東病院肝臓グループ 編集

東京大学教授大学院医学系研究科消化器内科

小 俣 政 男

本書は長年肝臓の治療の現場で携わってこられた竜崇正氏、吉野正曠氏、ならびに森山紀之氏の責任編集（国立がんセンター東病院肝臓グループ）による「肝臓診療 A to Z」と題された参考書であります。

内容はまさしくタイトルに示されたごとく、肝臓診療の A to Z、すなわち高危険群の設定から肝臓の診断治療までが 20 名の執筆陣によって分担執筆されています。その特徴は肝臓内科医、肝臓外科医、および放射線科医の三者の徹底したディスカッションに基づく第一線での肝臓治療のための方策が書かれていることであります。

責任編集者の竜氏は外科医として長らく肝臓を切除されてきており、極めて豊富な臨床経験を有しております。私どもの先輩であり、学生時代から尊敬している外科医であります。一方、執筆陣の中には若手の内科医も含まれています。

先端医療施設（国立がんセンター

東病院）としての特徴を生かして、すでに癌になられた患者さんに対する治療法について詳細に記載されており、これは大変重要なことであると思います。

また、肝臓癌の治療対策を考える際において重要な点は、他の癌と比し前駆する疾病ならびにその高危険群が明確になっている点であります。C 型並びに B 型肝炎ウイルスを病因とし、肝の線維化の進展により癌が発生した際の肝臓の結節の治療は、他の領域の癌とやや趣きを異にします。すなわち癌結節に対する根治的療法のみならず、その癌の発生をも考慮した肝臓治療、つまり背景肝をも含む 2 つの疾患に対する治療がより良き肝臓治療であることが、私は大変重要であると考えております。

その観点から考えますと、本書はその高危険群の設定から精査、入院、治療法の選択につき、豊富なスタッフによってシステマティックに記載

されています。

また画像診断の分野においても、森山氏を中心としてこの執筆グループは十二分な経験を有しておられます。

現在、肝臓切除による 5 年生存率は約 6 割と推定されます。しかしながら非切除例を含める 5 年生存率は約 4 割前後と考えられます。前述の 2 つの疾病を治すという視点から、肝臓治療は今後 5 年生存率は 7 割、あるいは 8 割を目指しうる疾患と考えられます。その意味から本書は肝細胞癌のみならず、背景肝をもいかにみるか基本的な考え方に貫かれており、推薦に値します。

その自然史からみても、実に肝臓が治る時代がまさしく到来していると考えられます。

● B5 頁 216 図 65 写真 190
カラー写真 4 表 13 2001 定価
(本体 8,500 円 + 税) 送料実費

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)